聖地のこどもニュース

オリーブの木

No.84
2022年 5月

イスラエル、パレスチナの武力衝突を取材中に射殺されたジャーナリストのシリーン・アブアクレさん。（イスラエルのwebニュース「The Times of Israel」より）

パレスチナは今、深い悲しみと怒りに包まれています。5月11日、パレスチナ人ジャーナリスト、シリーン・アブアクレさんが、イスラエル治安部隊のジェニン難民キャンプ急襲の取材中、頭部に銃弾を受けて命を落としたのです。彼女はエルサレム生まれのキリスト教徒で、中東の衛星テレビ局「アルジャジーラ」の特派員として、20年以上パレスチナの真実を世界に発信してきました。矛盾にみちた社会で貧困や人権侵害に悩む人々にとって、シリーンは自分たちの苦しみの代弁者だったのです。彼女をよく知るイブラヒム神父は、「シリーンは、自分の命をかけて一つのパレスチナを実現した」と言います。

13日葬儀の日、エルサレムではすべての教会の鐘が一斉に鳴り、宗派を問わず数十万人が葬列に加わりました。しかし残念なことに、そこでも治安部隊が介入し負傷者と逮捕者が続出、パレスチナ人の怒りはさらに高まっているそうです。今後の成り行きに予断を許さない日が続きます。

イスラエル・パレスチナが、世界の人々が平和のうちに共存できる日が一日も早く来ますように！　皆様、引き続きご支援をよろしくお願いいたします。

井上 弘子

認定NPO法人
聖地のこどもを支える会
事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野 5-8-7-502
Email ispalejpn@gmail.com
TEL/FAX 03-6908-6571

ご支援は… 郵便振替 00180-4-88173 加入者名「NPO法人 聖地のこどもを支える会」
当法人へのご寄付は、税制優遇が受けられます。
https://seichi-no-kodomo.org

「平和の架け橋プロジェクト2018」参加のシーラ・バハットさんに

佐藤真紀（当法人スタッフ）

2018年、「平和の架け橋プロジェクト」に参加するため来日したイスラエル人のシーラ・バハットさんが、大阪大学に短期留学のため再び来日しました。東京に来る機会があるというのでお話を伺いました。

Q. 自己紹介をお願いします。

S.B. こんにちは。シーラ・バハット（26歳）です。テルアビブの近くで生まれました。

2年間の兵役を終えて、「聖地のこどもを支える会」の平和の架け橋プロジェクトに参加。帰国後は大学で文化人類学と言語学を勉強していて、大阪大学に短期留学のために来日しました。私のルーツはアシュケナージ（東欧系ユダヤ人）です。

祖父と祖母は、ラトビアで生まれました。ナチスドイツのホロコーストを生き延び、シベリアへ逃れました。シベリアではスターリンの圧政が厳しく、ナチスが敗戦した後にドイツに逃れ、父は1947年に生まれました。その後一家は建国直後のイスラエルに移住しました。

Q. 2018年にこのプロジェクトに参加していますが、その動機は何だったんでしょうか？

S.B. 友人のノアという女の子が勧めてくれたんです。それまでも若者が平和を考えるプログラムに参加したことがありましたが、イスラエルとパレスチナの関係は冷え切っていて、隣にいるのに話しかけるのも難しい状況でした。私は、日本のアニメも好きだったので、その日本に来ることができてパレスチナ人との交流も図れるこのプロジェクトは完璧でした。

Q. イスラエルの人にとってパレスチナ人はどのような存在なのでしょうか？

S.B. 私が生まれ育ったテルアビブは世俗的な街でアラブ人（イスラエル国籍）も住んでいますが、あまり接触はありません。パレスチナ人のこととなると多くのイスラエル人は知ろうともしません。自分の人生が楽しければいいのですが、そのためには治安は重要です。ご存じかもしれませんが、私たちにはそのために兵役があります。女性も2年間入隊します。1か月は砂漠で銃の使い方などを学び訓練を受けましたが、そのあとは空軍の事務作業をしていました。私が入隊した2015年から17年はガザ侵攻もなく、平穏な時期でした。軍ではパレスチナ人とは言わずに「敵」という言葉を使っていました。

井上理事長と4年ぶりの再会を果たしたシーラさん（右）

Q. 昨年5月、イスラエルとパレスチナが激しく衝突しました。ガザではイスラエル側の激しい攻撃で256名が死亡、ハマスもロケット弾を放ち、イスラエル側にも13名の死者が出ましたね。その後はどうなっているのでしょう。

S.B. イスラエルの人たちの多くは、ガザにいる人たちのことをイスラエルを破壊する人たちだと思っています。攻撃中は報道されますが、ガザの内部がどうなっているかはイスラエル人にとっては関心はない。ミサイルが飛んでくることが脅威なのです。私たちは日本でのプロジェクトで、ガザから来た青年に話を聞くことができて、彼らの置かれている状況がよく分かりました。私は東エルサレムのシェイク・ジャラへのユダヤ人入植に反対するデモに、たびたび出かけますが、イスラエル兵の暴力をよく目撃します。

Q. ネタニヤフ前首相が下野しました。これからのパレスチナ問題の政治的な解決はどう見ていますか？

S.B. 私は、イスラエルとパレスチナが一つの民主主義国家として統合されるのが理想だと思います。なぜならば、このままだと、ガザと西岸が分断され続けて、そして、あのような小さな場所で移動が制限されている状況では人権が無視され続けるでしょう。仕事も期待できません。私はイスラエルのアラブ政党に期待しています。

イスラエルの国会では、政党が細分化される中で、アラブ系の政党も無視できなくなっています。2020年の選挙では　120議席中15議席をとり、第3党にまで躍進しました。2021年には、イスラム政党と袂をわかちましたが、それでも合わせると10

議席を持っています。彼らの声がパレスチナ問題の解決につながることを期待しています。

Q. ウクライナの状況はどう見ていますか？

S.B. ゼレンスキー大統領はご存じのようにユダヤ人で、ウクライナには多くのユダヤ人がいます。イスラエルはすでに15,000人ほどの難民を受け入れています。難民の受け入れについてのイスラエルの世論は割れています。

主に、右派はユダヤ系の受け入れには積極的ですが、「非ユダヤ人の難民は受け入れるべきではない」と主張し、政府は非ユダヤ人の上限を5,000人としました。左派は「宗教に関係なく、迫害されている者に対して分け隔てなく門を開くべきだ」との考えです。

一方パレスチナ人たちは、本来自分たちに帰還権があるはずなのに戻れない。複雑な心境だと思います。正確な数字はわかりませんが、ロシアからのユダヤ人も難民の中に含まれるようです。

この問題は複雑です。隣のシリアにはロシア軍が展開しています。（イスラエルは、シリア国内にイランが展開する基地へ空爆を加えているが、ロシアは黙認している）イスラエルはロシアを刺激してこのバランスを崩したくないのです。

Q. 最後に、これからスタディ・ツアーに参加する若者にメッセージをお願いします。

S.B. 道程は困難で不確定でも、人生の中でスタディ・ツアーのような経験をすることに価値があることを確信しています。ここに来て(イスラエル／パレスチナへ行って)この素晴らしい体験をすることが、あなたの将来を良きものにすることを願っています。

お祭りムードが一変 ――エルサレムだより・その後

矢加部 真怜（2014年スタディ・ツアー参加者）のFacebookから

聖地エルサレムでは4月、ユダヤ教の過越し、キリスト教のイースター、イスラム教のラマダンと、それぞれのお祝い事が同時に行われました。私の住んでいる東エルサレムはラマダンムード一色。4月1日からの1カ月、人々が断食をしている日中の物静けさは、夜になると一転、イフタール（断食明けの夕食）を終えた若者や家族連れが思い思いに街に繰り出し、一気に賑やかな雰囲気に。旧市街のアラブ人地区は色とりどりにライトアップされ、祝賀ムードに包まれました。

普段はお世辞にもサービス精神旺盛とは言えない旧市街の猫も、お祭りムードでご機嫌なのか、膝の上に乗ってきて、ひとしきり戯れさせてくれました。

パレスチナ人の友人たちと、ラマダン定番のお菓子・カダイフを頂きました。チーズやナッツをどら焼きの皮のような生地でくるみ、シロップをかけたもので、日本人の味覚にはやや大味ですが、とても美味しいです。

ラマダンの始まり：エルサレムのイルミネーション

エルサレムの猫もご機嫌

パレスチナの甘〜いケーキ、カダイフ

しかし、4月15日金曜日の朝、お祭りムードは一転してしまいました。イスラエル警察がエルサレム旧市街にあるイスラム教の聖地「アルアクサ・モス

ク」に突入し、礼拝に来ていたパレスチナ人との衝突が起きてしまったのです。イスラエル側は、「嘆きの壁」や警察に向かって爆竹や石を投げ始めたパレスチナ人を散会させるためだったとしていますが、パレスチナ人少なくとも152人が負傷する事態となりました。

これを受けてガザ地区を実効支配するハマスもイスラエル側にロケット弾を放ち、イスラエルが空爆で応酬するなど緊張が高まり、情勢の悪化が懸念されています。

本来ラマダンとは、家族みんなで楽しく祝うものなのでしょうが、それが叶わない人もいます。イスラエル兵に抗議したことで収監されて帰って来ない子どもの写真をテーブルに並べてラマダンの食事をとるパレスチナ人の年老いた母親の写真や、6人の子どもを持つパレスチナ人のシングルマザーがベツレヘム近郊の検問所で銃殺されたニュースなど、胸が締め付けられます。

我々は、衝突や空爆、そして「テロ事件」などの顕在化した事件に目が向きやすく、振り回されがちですが、その根底にはイスラエル軍による60年以上にわたる占領という構造的暴力があることから目を背けてはならないと思います。

今、全世界の視線はウクライナの人道危機に注がれています。主権国家がもう一方の主権国家を侵略するという、いわば「分かりやすい戦争」が人々の注目を集める中で、占領や入植という常態化した暴力と、それが引き起こす様々な人道危機にどうしたら関心を持ってもらえるのか、そして日本人という部外者として一体何が出来るのか、ガザ地区への人道支援に携わっていても、ふとした瞬間に無力感に襲われます。

このような状況だからこそ、イスラエル・パレスチナ双方の若者たちと短期間ながら交流し、本音をぶつけ合い、友情を育んだ我々が、当事者の声を代弁し伝えていくことの意義は大きいのではないかと思います。「聖地のこどもを支える会」のスタディー・ツアーを通じてできたご縁を大事にしつつ、微力ながら発信を続けていきたいと思います。

スタッフ紹介　佐藤真紀さん

はじめまして。4月から当法人事務局を手伝っています佐藤真紀です。

1997年から2002年まで、日本国際ボランティアセンター、国連ボランティアの仕事などでパレスチナに滞在していました。その後イラク支援のNGO を立ち上げ、がんの子どもの支援をする傍ら、シリア難民の支援も行ってきました。

現在は、多摩大学グローバルスタディーズ学部で中東全般を教えています。

パレスチナは、20年ぶりのかかわりになります。今回「コーヒー募金」を担当することになりました。20年前にエルサレムで飼っていた猫を、近所のアドナン君が描いてくれた絵をパッケージに使いました。これからは、当団体が支援している子どもたちの絵を使っていろいろな商品を開発していきたいと思っています。よろしくお願いします。

「平和を願う対話の旅」の準備について

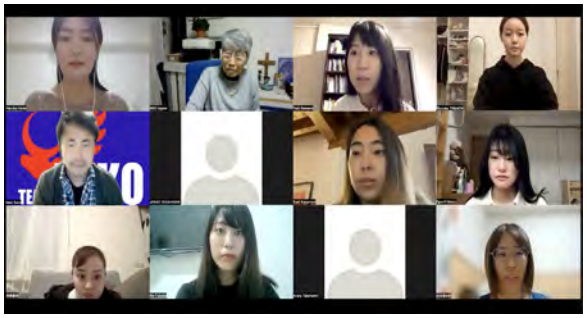
髙橋 彩子（2022スタディ・ツアー参加予定者）

それでもスタディ・ツアーをあきらめない！

コロナ感染拡大で2020年3月以来、延期を繰り返しているスタディ·ツアー「平和を願う対話の旅」は、本年8月になんとか実施することを目指して計画を進めております。

コロナだけでなく、現地での物価高·円安·ウクライナ侵攻による飛行機の便数やルート変更の影響で参加費の見積もりも増加する一方です。平和の危機が叫ばれている時だからこそ、若者が現地を自分の目で見て体験し、平和について考えられるよう準備をしていきます。

参加を予定しているメンバーは、当初予定していた全4回の事前研修を終えた今も毎月勉強会を行って知識を深めると共に、イスラエル·パレスチナへの関心を失わないように努めています。



事前研修のオンライン画面

2022年3月以降の活動

毎月の勉強会（オンライン）
3月12日（土）
ドキュメンタリー映画『沈黙を破る』※の鑑賞、ディスカッション、感想の共有。

※ イスラエル軍によるヨルダン川西岸への侵攻作戦の中で起こった、難民キャンプへの侵攻を記録したドキュメンタリー。作中、兵役を終えたイスラエルの青年が軍隊の中で体験した苦悩を語る。

4月9日（土）
当NPOのスタディ·ツアー参加者の体験談を聴く
感想の共有、質疑応答

OG/OBも交えた充実の事前研修

延期が決定してから毎月開催している事前研修を紹介します。
この事前研修は、参加予定者の一部が中心となって企画や当日の司会進行をおこなっています。

4月はOG/OBの5名を招き、スタディ·ツアーに参加して印象に残ったことや、その経験が自身に与えた影響などについて、実際の写真とともに話してもらいました。

参加予定者からは、「実際の写真や現地のことを先輩方から聞くことで、スタディ·ツアーに参加する実感が湧いてきた」「現地でどのようなことを達成したいのか考えるのに役立った」などの声があがりました。

いつ現地に行けるのかまだわかりませんが、参加者は8月の実施を信じて、知識面でも精神面でもしっかり準備をしています。

研修に参加してくれたOG/OBからも「OG/OB同士でも面識のない人がいて新鮮だった」(＊参加した年が違うため)、「久しぶりにイスラエル·パレスチナのことについて話す良い機会になった」などの感想をいただきました。OG/OBにとっても有意義な時間になったと思います。

質疑応答では、現在海外を拠点としているメンバーが現地の様子を報告したり、さまざまな分野で活躍するOG/OBに進路相談をする者がいたりして、スタディ·ツアーの事前研修という枠にとどまらない勉強会、交流会になりました。

今後もスタディ·ツアーやプロジェクトに参加して終わりではなくて、過去の参加者や新しい参加者が関わることのできる場を作れたらと思います。

ロシアのウクライナ侵攻から見えてくるもの

村上 宏一（当法人副理事長・元朝日新聞中東アフリカ総局長）

ロシアのプーチン大統領が主導するウクライナ侵攻は、この原稿が読まれるころまでに急な展開が起きているのかどうか、見当がつきません。私たちは報道に見るロシア軍の非道さに怒りを募らせながらも、傍観者であることの無力さを感じてきました。それでも、この歴史的な事件から何をくみ取り、何が問題なのかを考えるべきだと思います。

侵攻 受け止めに温度差

ウクライナでの戦争と直接のかかわりはなさそうに見えた中東から、イスラエルのベネット首相がモスクワを訪れてプーチン大統領と会談、というニュースが入ってきました。侵攻開始の2月24日から10日と経っていませんでした。なぜイスラエル首相が？　実はイスラエルは、旧ソ連から大量のロシア系ユダヤ人が移住し、そのつながりから互いに貿易依存度が高くなっています。ベネット首相としては、ロシアとの関係に傷をつけず、しかも国際的には停戦に向け仲介の労を執ろうとした、と印象付けようとしたのでしょう。ロシア軍による戦争犯罪行為が報じられるようになって、さすがに親ロシアと見られないよう気を付けてはいますが、世界的な対ロ経済制裁とは距離を置いています。

一方、侵攻について「受け止めに温度差」という記事が3月10日の朝日新聞に載りました。中東アフリカ総局長によるもので、「ツイッターでアラブ圏からの投稿を見ると、新たな紛争への悲しみや平和を願う声があふれる一方で、ロシアに激しく反発する米欧を皮肉るようなツイートも目立つ」と述べ、「パレスチナ自治区ガザへの爆撃で米欧はイスラエルの肩を持った」「ウクライナよりイエメンの内戦（注）の方が深刻だ」といった内容を紹介していました。ニューヨークの貿易センタービルなどに旅客機が突っ込んだ2001年9月11日の同時多発テロの時、同じ中東アフリカ総局長だった私（当コラムの筆者）は、「残酷なテロの被害者家族の怒りは当然としても、中東では同じような怒りが日常のこととして積み重ねられている」という趣旨のことを書きました。

もちろん、アメリカでのテロ被害は大したことではないという意味ではありません。ウクライナ侵攻をめぐる記事にも、ウクライナへの同情を低めようという意図はありません。中東をはじめほかの地域でも、抗しようのない暴力に痛めつけられている人々がいることを忘れないようにしたいという、かつての私と同じことを考えて書かれたものだろうと思い、引用しました。ヨーロッパでは、シリアなどからの難民を排除する動きが強まっています。一方でウクライナ難民は積極的に受け入れられ、住まいや仕事の面倒さえ見てもらえると報じられています。地理的にも、文化的にも遠い中東とは違い、ヨーロッパから見ればウクライナに対しては親和性を感じているのは明らか。中東などの人々の間には、対応に差を生む二重基準への怨みがまた積み重なるだろうと、暗い気持ちになります。

事実曲げる「大本営発表」

ところで、筆者の友人がロシアの暴挙を止めるために、「ロシア以外に住んでいるロシア兵の母や妻がウクライナに向かい、人柱になってくれれば、プーチンと言えどもこれは攻撃出来ないのでは」と思い、彼女たちに呼びかける文章を用意して、伝える手段はないだろうかと尋ねてきました。

そんな女性たちをどうやって探し、文章を伝えるのかという現実論はともかく、「こんなことでもしないと」という思いは笑えません。ただし、プーチン大統領が動かしたロシア軍は病院に対する爆撃も躊躇していません。しかも、病院にいて攻撃された妊婦の映像が流されると、あれは女優による演技であって病人などいなかったとして、非軍事施設への攻撃ではなかったと強弁する始末です。ロシア女性たちのデモを蹴散らしても、デモはウクライナ側の偽装工作だなどと言って平気でいるかもしれません。

そもそも、兵士の家族たちが反戦に立ち上がろうとする環境を作らせまいとするのが、米国のトランプ前大統領の得意技「フェイクニュース」宣伝と同様の情報作戦です。欧米の流すニュース・映像は、ロシアの正当な対ウクライナ「特殊作戦」を侵略戦争であるかのように見せる謀略だというわけで

す。真実の報道を困難にさせる本物の（?）フェイクニュースは、民主主義の大敵です。さらに、プーチン政権は外国から事実を伝える情報が入らないように手を尽くすほか、ウクライナ侵攻に異議を唱える市民が拘束されたり、政権批判につながる報道の自由が封じられたりしています。

日本でも戦時中、大々的な戦果を伝えていた「大本営発表」が国民を欺くものであった歴史がありますが、過去の話だとすませてはいられません。2019年の参議院選挙の際、札幌市で街頭演説していた安倍首相（当時）にヤジを飛ばした男性が、警察官によって後方へ連れ出されました。その後も、閣僚の演説に男性が抗議の声を上げただけで、警察官に移動させられる事態が起きました。札幌の強制排除を違法と訴えた裁判で、札幌地裁はこの3月、この訴えを認める判決を出しました。ロシアとは違って司法が機能を果たしたと言えます。ただし、違法な規制も、それを正そうとする動きがなければそのまま通ってしまうことを、忘れないようにしないといけない世の中です。

無法者を利する核抑止論

ロシアのウクライナ侵攻開始から間もない2月27日、安倍元首相がテレビ番組で、米国の核兵器を国内に配備し共同運用する「核共有」について議論すべきだと発言しました。「議論を」と言ったものであって、「核配備を」と主張したわけではないものの、歴代内閣が堅持してきた「持たず、つくらず、持ち込ませず」という非核三原則への挑戦です。ウクライナ侵攻という事態が日本国民の安全保障意識を高め、核持ち込み議論に追い風になると見たからでしょう。核廃絶を唱えるべきなのに核の効果に頼ろうという姿勢がまず問題ですが、そもそも核の抑止力に頼れるのかを問うべきでしょう。

核を配備すれば、核の報復を恐れて誰も攻撃してこない、というのが抑止論です。しかし、プーチン大統領が核使用も躊躇しない姿勢を見せている事態に直面して、それが虚構であることがはっきりしました。米軍も北大西洋条約機構（NATO）軍も、ウクライナ支援のための武器供与などはしても、ロシアとの本格的な戦争になるのを恐れて、武力介入には慎重な姿勢でいます。まして核戦争の可能性があるとなると、うっかり手出しはできない。核兵器は、無法者が「使うぞ、使うぞ」と脅してくるのに対して、「それならこちらも」と、安易に対抗措置として使えるものではないということです。つまり核の抑止効果は、核を持つ侵略者が他国に反撃を躊躇させるという意味で働くものであり、平和を望む国々にとっては効果のないものです。

故パウエル元米国務長官

米軍統合参謀本部議長を務め、米国務長官にもなった故パウエル氏は生前、朝日新聞のインタビュー（2013年7月10日付）で、かねて唱えていた核兵器不要論の理由について「極めてむごい兵器だからだ」と明言し、「まともなリーダーならば、核兵器を使用するという最後の一線を踏み越えたいとは決して思わない。使わないのであれば基本的には無用だ」と強調しました。

まともなリーダーになりたい人々には、かみしめてほしい言葉です。

注　イエメン内戦：アラビア半島の南端にあるイエメンでは2015年以降、イスラム教シーア派の武装組織「フーシ派」と暫定政権との間で内戦が続き、約2900万の人口のうち約10万人が犠牲となり、300万人以上が難民となっているという。

認定NPO法人**聖地のこどもを支える会の**

会員になりませんか?

さまざまなプロジェクトをはじめ、当会の活動・運営を総合的に支えていただく会員制度。あなたのご意見が、平和のつくり手を育てます。事務局までお気軽にお申し出ください。

正会員	個人	年額 12,000円／1口
	学生	年額 6,000円／1口
賛助会員		年額 6,000円／1口

正会員は、当法人の総会等での議決権を行使することができます。

連帯事務局のアブダラさんから届いた子どもたちの笑顔

聖ヨゼフ学院（エルサレム）の生徒たち、様々な活動のようすです。

先生のお話を聞くのもマスク着用で。

太鼓代わりにボールをバチで叩いて？　リズムの練習。

パレスチナ伝統のパンの焼き方を習います。

仮装祭りで元気いっぱい。「お菓子もらったよ！」

教会でお祈りの時間。「あなたたち、静かに！」

平和を願う「オリーブの木、はと、パレスチナの旗」の絵の前で、お茶のひととき。

スタディ・ツアーの思い出を語る

2013年スタディ・ツアー参加者、久しぶりの再会。パレスチナ・レストラン「アルミーナ」で。

2018年スタディ・ツアーの一コマ。エフェタ聴覚障害児学院を訪問、ダンスなどで楽しいひとときを過ごしました。

悲しみの葬列

アルジャジーラのシリーン・アブアクラ記者の棺を運ぶ葬列。イスラエルの警官隊と参列者が衝突し、もみ合いの中で棺が揺さぶられ、地面に落ちそうになることも。

写真撮影　アブダラ・アタラ、ダリーヌ・ラマ、シーラ・バハット、矢加部真怜、井上弘子